京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十九年五月一日発行
通巻九九三号（毎月一回一日発行）

5月号

—近詠—

雛の前

丸山佳子

嵯峨ハッピー二千人なる凧日和

世が変るわたしも変りバレンタイン

地虫出づ禁じられてる遊び場に

耳ざはり良いお話で青き踏む

PDF= 俳誌の salon

引つ張りし椅子の奇声に庭芽吹く

いい汗を背すぢに南無と大師坂

新しいお幣に合掌登山口

雛の前少し敬語でお箸もつ

曖昧なパーセント語に木の芽風

今を詠む余命のペンに初笹子

PDF= 俳誌の salon

—近詠—

豊田都峰
清響集　その七十三

風船を突けばひかりの生まれつぐ

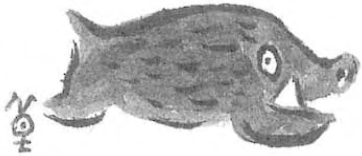
薄氷は月のこぼれしあたりなる

うすらひのあをさは星のわすれもの

薄氷はちりちり風のひとすべり

もてなしは母のしてゐる木の芽和

左保姫の袖に生まるる白き雲



PDF= 俳誌の salon

勿忘草咲かせ忘るるなにもなし

春もまだ風の風追ふ二三日

磯遊び砂のうらまでひからせて

臥を挿す遠き伊吹をしるべとし

鳥ぐもり湖国はけふも遠目ぐせ

鴨かへる城趾の沖にひと鳴きし

鴨のこる淡海てふ名をすてがたく

草おぼろにじむことなき母の燭

PDF= 俳誌の salon

秀華採集

流氷を見にゆく話畳拭く　　直江裕子

この組み合わせはおもしろい。「流氷」と「畳」はともに平面であるが、この心の移り行きには、なんの間合いもない心理がうまく掬い取られている。この事だけを描けば、いくらでも自分が、人間が、心理が描ける。

凩や盆地に火種めく灯り　　金子野生

梅一輪こころ澄むまで墨磨らむ　　林日圓

前句の「盆地」の空間把握が、一段と火種を持つ人間関係を濃くさせている。後句の「梅一輪」の設定がよい。

PDF= 俳誌の salon

鈴鹿　仁

さくら貝

下萌えてきのふより今日意を通す
海ぢゆうの波長聴きゐるさくら貝
さくら貝一と夜の夢を閉ぢしまま
一願や風が後押す鐘おぼろ
草おぼろ一村を守る神祠
啓蟄や乱世の本音聞き洩らす
末黒野のきりりきりりと後生かな

近詠

宇都宮滴水

落し角

薄ら氷のうらを見たくて礫打つ
更生の一角くづし地虫出づ
さりげなく刻過ごしけり春告鳥
はつ枝より春うごき出す仏みち
穴を出て鳴咽はじまる幼年期
序の区切りつけ啓蟄の陽に遊ぶ
落し角風のひと筋わがままに

PDF= 俳誌の salon

神麓集

林　日圓

春一番吉田光由塵劫記
芽木の風ベストセラーに塵劫記
たちまちに類書三百春二番
数学力高める契機春三番
劫記碑の常寂光寺梅万朶

北村香朗

バリ島へ

寒の日本脱けてバリ島一と飛びに
孫擧式へ初旅バリは神の島
亥年明け赤道を越ゆ旅に在り
一月や常夏の島に四肢伸ばす
寒と覺えぬ常夏の島の汀風

丸山冬鳳

神杉や粉雪鎧ふ多聞天
粉雪のいつしか雪片杉銀座
粉雪や風の木立の相撲塩
寒杉のまだまだ幕下六枚目
雑木その花咲く雪の土俵入り

藤岡紫水

利休ねづみ

寒の明け湖は湯冷めの靄込みに
その先は汐風ばかり下萌ゆる
山の影追ひて解けゆく春氷
軋みつつ日差し過ぎゆく野焼あと
翳りては利休ねづみに猫柳

山田をがたま

信貴山

絵巻物断片飾る冬山宿
大小の寺点在す枯木山
寺縁起誇りて山に寒篭り
枯木山断崖見上ぐ露天風呂
漢深き冬宿に売る保存食

丹生をだまき

熱燗や日頃無口が堰をきる
利き酒のその一杯に足取らる
淵明を李白を論じ燗熱う
酒讃むる詩(うた)を吟じて雪見宿
焦がれ来し雪の近江のかくれ里

PDF= 俳誌の salon

神麓集

服部　郁史

手と足が笑つてゐるよ阿波踊
白桔梗嗣治の中の女たち
父と子の靴並べあり野菊晴れ
わがままな私を待つ柿の家
空つぽの胃を母が待つ落葉坂

吉田　多美

春を待つ履かぬ病夫の靴磨き
眞夜窓を叩くは老いし雪女
枯山に煙一すぢ人の栖む
梅の香の思ひ出若き頃ばかり
心中に鬼を栖ませて豆を撒く

角　直指

女子柔道二十四年を閉づ師走
こだはりのメダルに挑む十二月
数へ日となる卒壽とは避けられず
進級発表して数へ日の一つ減る
何かしてをらねば老ゆる年の暮

猫　柳　荻野　千枝

いぶし銀の命ほつほつ猫柳
やさしさの言葉とならず猫柳
猫柳せせらぎを聞く耳となる
寒夕焼イクラ百粒噛みつぶす
溶けさうで溶けぬ瞼(め)おぼろなる反感

節の夜　北川　孝子

聖バレンタイン心に封じ置く言葉
ひつそりと生きて悠悠犬ふぐり
豹変の世情にどつぷり寒極む
焦げぐせの鍋いたはれり窓に雪
節の夜のもの思ふ影どこまでも

青　嵐　竹貫　示虹

鍵穴の前方後圓青嵐
罌粟散りぬ父とはちがふ道を來て
松蟬や起床喇叭は鳴らねども
同じ夜が來る筍を釜で煮て
みどり野の鹿より熱き鹿の角

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

豊田都峰選

流氷を見にゆく話畳拭く
何事もなけれどきゆんと梅ひらく
ひよつとして今が晩年すみれぐさ
一匹とひとり潤目の煙りをり
ふくろうの自虐暗がり抜けられず
凩や盆地に種火めく灯り
煤逃げや図書館休みとは知らず
飛石の位置確かなり去年今年
吐く息のすでに淑気や男坂
早梅に始まる寺の庭明り

千葉　直江　裕子

青梅　金子　野生

寸にして早や鋭さの菖蒲の芽
繚乱の夢を束ねし牡丹の芽
外科なべて仏心鬼手や春の闇
蹲踞に料峭の水溢れをり
梅一輪こころ澄むまで墨磨らむ
土間敷に火吹きの竹や婆白寿
我を通す画幅に競ふ冬の鵙
共稼ぎ広き厨に古暦
ぐい呑の拗ねし丸さや飾り海老
門松の細さ失はれゆく父権

舞鶴　林　日圓

さいたま　加藤　杉穂

PDF= 俳誌の salon